大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：内山 彩香（臨床心理学コース）

■研究題目

精神疾患を抱える家族におけるコミュニケーションに関する研究

■研究代表者・分担者（氏名、コース）

内山　彩香（臨床心理学コース・博士課程後期１年）（代表者）
稲木　澪里（臨床心理学コース・博士課程前期１年）
栗原　茉子（臨床心理学コース・博士課程前期１年）
萩原　真由（臨床心理学コース・博士課程前期１年）

■研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）

問題と目的

ヤングケアラーとは，「本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っている子ども」である（こども家庭庁，2023）。ヤングケアラーが担う役割は多岐にわたり，学習や友人関係，進路選択などの同世代の子どもが経験する時間・機会が脅かされることが明らかになっている（Dearden & Becker, 2004）。しかし，このような困難な状況の中で，ヤングケアラーはケアをすることに対してやりがいや達成感を獲得していることが報告されている（参考として，Cassidy& Giles, 2013; Wepf et al. 2021）。この概念は，ベネフィットファインディング（Benefit finding；逆境からベネフィット（得られたものや肯定的な変化）を導き出すプロセス）と呼ばれ，諸外国を中心に注目されている（Cassidy et al.,2014）。

ヤングケアラーのベネフィットファインディングについて検討した内山他（印刷中）では，精神状態のケアを担うヤングケアラーは，子が親の役割を担うため情緒的に逆転している可能性が考えられ，このような親子関係が逆転した家族機能がベネフィットファインディングに負の関連を示すことを示唆している。親子の役割逆転とは，「子どもが親の世話をし，親は自分の親としての責任をほとんど無視すること」と説明されており（山田他，2015），構造派家族療法では心理的な発達や生活適応のリスクになる可能性が示唆されている（Minuchin，1974）。一方で，精神疾患を抱える家族のケアを行うヤングケアラーについては，行為上での役割逆転現象が生じている親子関係の中でも，親子が互いに情緒的に助け合う関係であれば，ヤングケアラーが自己の役割を肯定的に捉え，効力感を持ちな

がらケアに関わっている可能性が指摘されている（奥山，2021）。これらの知見を踏まえると，親子の役割逆転現象が生じていても，情緒的に助け合うことができる関係性であれば，ヤングケアラーのベネフィットファインディングに正の関連を示すが，親から子へのサポートが放棄されている場合，ベネフィットファインディングに負の関連を示すと予想される。

そこで本研究では，ケアに関連する変数を統制したうえで，親子関係の役割逆転現象がベネフィットファインディングに与える影響について明らかにすることを目的とする。本研究では，25 歳時以前から精神疾患を抱える家族をケアした経験を持つ元ヤングケアラー当事者を対象として調査を行った。

方法

1）調査時期

2024 年 1 月～2 月

2）調査対象者

110 名（男性 61 名，女性 49 名，平均年齢 38.04 歳，*SD*=9.40）

3）調査手続き

インターネット調査

4）質問紙の構成

フェイスシート　年齢，性別について回答を求めた。

ケア経験について　ケア対象者との続柄，回答者がケアを始めた年齢，ケアをしていた期間，平日 1 日あたりにケアに費やした時間，親の精神疾患の種別，行っていたケアの内容について尋ねた。行っていたケア役割は，「①障害や病気のある家族に代わり，家事をする，②家族の代わりに，幼いきょうだいの世話をする，③家族の代わりに，生涯や病気のあるきょうだいの世話をする，④目を離せない家族の見守りや声掛けをする，⑤家族の通訳をしている，⑥アルコール・薬物・ギャンブルなどの問題のある家族に対応する，⑦病気の家族の看病をする，⑧障害や病気のある家族の身の回りの世話をする，⑨障害や病気のある家族の入浴やトイレの介助をする」について，「1.まったくない」～「5.頻繁にある」の 5 件法で回答を求めた。

親子関係の役割逆転　ヤングケアラーの親子関係の役割逆転現象を測定するために，山田他（2015）によって開発された「親子関係の役割逆転尺度」を用いた。この尺度は，「親の過期待」「親の屈折的甘え」「親から子へのサポート放棄」「子どもによる情緒的サポート」の 4 因子で構成されている（16 項目，6 件法）。

ベネフィットファインディング　ケア経験によって得られた価値観を評価するために，渡邊（2020）によって選定されたベネフィットファインディングの項目を用いた（24 項目，7 件法）。下位尺度項目の平均値を算出しベネフィットファインディング得点として

分析に用いた。

操作チェック項目　「家族のケアに関する経験についてどれくらい思い出すことが出来ましたか」と尋ね，「全く思い出せなかった」「あまり思い出せなかった」「どちらかというと思い出せなかった」「どちらかというと思い出せた」「少し思い出せた」「非常に思い出せた」の 6 件法で回答を求めた。「全く思い出せなかった」「あまり思い出せなかった」「どちらかというと思い出せなかった」を選択した者は分析から除外した。

不良回答者の選出の項目　増田他（2019）が作成した Instructional Manipulation Check 課題を用いた。課題の教示文の中に「どの選択肢も選ばないで先に進むように」という教示があり，その項目に回答せずに「次へ」と書かれているボタンをクリックすることが求められている。不良回答者として選出された者は分析から除外した。

倫理的配慮

調査ページの冒頭には，調査目的と同意は個人の自由意志に基づくこと，調査は匿名で行い，個人情報が外部に流出しないことを明記し，調査協力の同意が得られた者のみが回答に進める構成とした。なお，本研究は，東北大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認 ID:23-1-072）。

結果

各尺度の記述統計量，α 係数，尺度間の相関係数を Table1 に示す。ケア対象者との続柄は，父親が 25 名，母親が 84 名，父親・母親両方と回答した者が 1 名であった。親の疾患の種別は，気分障害（うつ病，双極性障害）が 76 名，統合失調症が 21 名，依存症が 7 名，高次脳機能障害（記憶障害，注意障害，遂行機能障害，社会的行動障害）が 6 名であった。

次に，ダミー変数化した性別（男性=1，女性=0），ケア開始年齢，ケア期間，平日 1 日当たりのケア時間，9 種類のケア（①家事，②幼いきょうだいの世話，③障害や病気のあるきょうだいの世話，④見守りや声掛け，⑤通訳，⑥アルコール・薬物・ギャンブルなどの問題のある家族の対応，⑦病気の家族の看病，⑧身の回りの世話，⑨入浴やトイレの介助）の頻度を統制したうえで，役割逆転とベネフィットファインディングとの関連を検討するために強制投入法による重回帰分析を行った。分析の結果を Table2 に示す。結果から，ベネフィットファインディング得点に対して，ケア開始年齢，家事，幼いきょうだいの世話，子どもによる情緒的サポートは有意な正の関連（ケア開始年齢；β=.20, p=.02, 家事；β=.28, p=.001，幼いきょうだいの世話；β=.25, p=.01，子どもによる情緒的サポート β=.29, p=.001），平日 1 日当たりのケア時間と親から子へのサポート放棄は有意な負の関連が示された（平日 1 日当たりのケア時間；β=.－23, p=.007，親から子へのサポート放棄；β=.－44, p<.001）。

Table1 各変数の記述統計量と相関係数

	M	*SD*	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1 ケア開始年齢	14.96	3.76	—																
2 ケア期間	11.93	10.23	-.20*	—															
3 平日1日当たりのケア期間	3.49	2.12	.02	.17	—														
4 家事	3.87	0.90	-.16	.19	.23*	—													
5 幼いきょうだいの世話	2.08	1.38	-.24*	.13	-.05	.01	—												
6 障害や病気のあるきょうだいの世話	1.84	1.15	.06	-.14	.08	.06	.58**	—											
7 見守りや声掛け	3.11	1.34	.14	.11	.30**	.17	.16	.36**	—										
8 通訳	2.23	1.34	.15	.09	.38**	.14	-.03	.17	.50**	—									
9 アルコール・薬物・ギャンブルなどの問題のある家族の対応	2.15	1.41	.10	-.08	.23*	-.02	-.05	.03	.24*	.37**	—								
10 病気の家族の看病	3.36	1.18	.15	-.04	.32**	.22*	.02	.19	.39**	.28**	.02	—							
11 身の回りの世話	3.40	1.12	.13	.04	.38**	.36**	-.06	.02	.42**	.32**	.23*	.52**	—						
12 入浴やトイレの介助	2.00	1.21	.20*	.03	.44**	.19	.08	.30**	.36**	.44**	.20*	.51**	.54**	—					
13 親の過期待	3.79	1.27	.01	.14	.23*	.03	-.04	-.01	.26**	.41**	.28**	.13	.13	.15	(.89)				
14 親の屈折的甘え	4.01	1.28	-.10	.18	.26**	-.00	-.16	-.15	.13	.29**	.13	.01	.09	.03	.55**	(.95)			
15 親から子へのサポート放棄	3.63	1.23	-.20	.10	.07	-.05	-.08	-.12	-.09	.03	.12	-.17	-.14	-.19*	.17	.40**	(.91)		
16 子どもによる情緒的サポート	4.55	0.88	.09	.07	.21*	.04	-.19	-.06	.13	.28**	.03	.22*	.14	.19*	.44**	.31**	-.20*	(.84)	
17 ベネフィットファインディング	4.16	1.32	.21*	.02	-.11	.24*	.16	.14	.10	.10	-.05	.25**	.14	.22*	.02	-.22*	-.60**	.35**	(.97)

注：相関表の括弧内の値はα係数を表す。
**p<.01, *p<.05

Table2 ベネフィットファインディングを目的変数とした重回帰分析の結果

変数名	β	95%下限	95%上限	VIF
性別 [1)]	−.01	−.42	.37	1.21
ケア開始年齢	.20*	.01	.13	1.35
ケア期間	.05	−.01	.03	1.31
平日1日当たりのケア期間	−.23**	−.25	−.04	1.53
家事	.28**	.18	.64	1.31
幼いきょうだいの世話	.25*	.05	.42	1.96
障害や病気のあるきょうだいの世話	−.07	−.31	.15	2.16
見守りや声掛け	−.08	−.27	.10	1.88
通訳	.06	−.13	.24	1.87
アルコール・薬物・ギャンブルなどの問題のある家族の対応	.06	−.10	.20	1.40
病気の家族の看病	.13	−.06	.35	1.75
身の回りの世話	−.07	−.32	.15	2.08
入浴やトイレの介助	.05	−.16	.27	2.10
親の過期待	.00	−.19	.20	1.89
親の屈折的甘え	−.04	−.24	.15	1.93
親から子へのサポート放棄	−.44**	−.65	−.29	1.54
子どもによる情緒的サポート	.29**	.18	.69	1.60
調整済みR^2	.49***			

1)　男性=1，女性=0
***p<.001, **p<.01, *p<.05

考察

本研究では，親子の役割逆転とヤングケアラーのベネフィットファインディングとの関連について検討を行った。その結果，親子関係の役割逆転の中でも「親から子へのサポート放棄」がベネフィットファインディングに対して負の関連を示した。精神疾患によって親の養育が困難になり，親から子に対する情緒的交流が希薄になると，子のベネフィットファインディングに繋がらず不適応が促進される可能性が示唆された。また，「子どもによる情緒的サポート」については，ベネフィットファインディングに対して正の関連を示した。親を安心させたり喜ばせる情緒的サポートは，子ども自身のベネフィットファインディングを促進させ，ケアに対するやりがいや達成感を獲得している可能性が示された。以上から，精神疾患を抱える家族のケアをするヤングケアラーのベネフィットファインディングは親子関係の役割逆転現象の影響を受けることが示された。

文献

Cassidy, T.& Giles, M. (2013) Further exploration of the Young Carers Perceived Stress Scale: Identifying a benefit-finding dimension, British Journal of Health Psychology, *18*(3), 642-655. https://doi.org/10.1111/bjhp.12017

Cassidy,T., McLaughlin,M. & Giles,M. (2014) Benefit finding in response to general life stress: measurement and correlates, Health Psychology and Behavioral Medicine, 2(1), 268-282. https://doi.org/10.1080/21642850.2014.889570

Dearden, C. & Becker, S (2004): Young carers in the UK: the 2004 report. Retrieved February 11, 2024, from https://hdl.handle.net/2134/627

こども家庭庁（2023）.こどもがこどもでいられる街に。 Retrieved February 11, 2024, https://www.mhlw.go.jp/young-carer/

増田 真也・坂上 貴之・森井 真広 （2019）. 調査回答の質の向上のための方法の比較　心理学研究, *90*(5), 463-472. https://doi.org/10.4992/jjpsy.90.18042

Minuchin, S. (1974). Family and family therapy. Harvard University Press.（山根 常男（監修）（1984). 家族と家族療法　誠信書房）

奥山 滋樹（2021）. ヤングケアラーにおける家族システムおよび親子サブシステムが当事者の生活適応に及ぼす影響に関する研究　東北大学大学院博士論文

内山 彩香・小岩 広平・若島 孔文（印刷中）.ヤングケアラーにおけるケア経験と家族機能がベネフィットファインディングに及ぼす影響の検討　家族心理学研究，*37*(2)

渡邊 ひとみ（2020）.青年期のアイデンティティ発達とネガティブ及びポジティブ経験に見出す肯定的意味 心理学研究, *91*(2),105-115. https://doi.org/10.4992/jjpsy.91.19010

Wepf, H., Joseph, S. & Leu, A. (2021). Pathways to Mental Well-Being in Young Carers: The Role of Benefit Finding, Coping, Helplessness, and Caring Tasks. Journal of Youth and Adolescence, 50, 1911–1924. https://doi.org/10.1007/s10964-

021-01478-0

山田 智貴・平石 賢二・渡邉 賢二（2015）大学生における親子関係の役割逆転に関する研究――疑似成熟との関連から――　家族心理学研究，*29*(1)，1-18. https://doi.org/10.57469/jafp.29.1_1